手つかずの部屋
第一回

Waltzing Matilda
荒野をさすらう旅人の歌

矢原　徹一

植物の調査のために世界を旅するうちに、訪問した土地の地理・歴史や文化について学ぶ機会も少なくなかった。この「手つかずの部屋」では、旅の思い出とともに、私が訪問した国を紹介するエッセイを書いてみようと思う。まずは、オーストラリアから始めよう。

オーストラリアはアメリカ合衆国の約8割の国土面積を持つ巨大な国だ。南東部のメルボルンから、南西部のパースまで車で移動すると一週間かかる。その移動ルートの大部分は砂漠なので、途中で車が故障したりすると大変な目にあう。私の場合、植物が生えていない砂漠にはあまり興味がないので、雨が多くて植物が豊かな東部山地を南北に移動しながら、染色体数がたった2本のキク科植物とその近縁種を探しまわった。日本人のような名前のケンさんの運転で、時には野宿もしながら約1か月の旅をした。

オーストラリアの大地には、乾燥したユーカリの林がひろがっている。その明るい林で、カンガルーが飛び跳ねているのを見ると、オーストラリアにいることが実

感できる。そんなユーカリの林で野宿をしたとき、ケンさんは、夕食のおかずにはなりそうもないくず肉をただで貰ってきた。そのくず肉をクリークに放り込むと、またたくまにヤビーと呼ばれるザリガニが集まってきた。そのザリガニを掬って、炒めて食べた。ワライカワセミの声を聞きながら食べるヤビーは、このうえもない御馳走だった。

そのケンさんに、遠い記憶の中にあるオーストラリアの歌を口ずさんで、知っているか尋ねてみた。スタンリー・クレイマー監督の『渚にて』という映画の最後で繰り返し流れる歌だ。たぶん、中学時代にNHK番組で観た映画だと思う。調べてみると、製作されたのは1959年。ずいぶん古い映画だ。第三次世界大戦で世界が放射能に汚染され、生き残った人類はオーストラリアで暮らしている。そのオーストラリアにも放射能汚染が広がりつつある中で、いつもと変わらない生活を送る人たちが、この歌を歌う。映画は「兄弟よ、まだ遅くない」というメッセージで結ばれていた。映画の内容はそれ以上思い出せないが、この歌のメロディだけは記憶にしっかりと残った。何という歌なのか、どういう歌なのかを知りたいと、ずっと思っていた。その疑問に、ケンさんが答えてくれた。

歌の名前は、「ウォルツィング・マチルダ」(Waltzing Matilda)。オーストラリア民謡で、オーストラリア国民なら知らない人はいないそうだ。国歌にしようという提案が何度もなされたことがあるくらい、オーストラリア国民からとても愛されている歌だ。ケンさんが野帳に書きとめてくれた歌詞を見ながら、一緒に歌った。歌詞には方言が使われていて難しく、またこの歌が生まれた背景を知らないとよく理解できない。でも、韻を踏んだ歌詞はとても響きが良く、軽快でかつ情感のあるメロディとともに、私の心をとらえてはなさない魅力があった。

Once a jolly swagman camped by a billabong
Under the shade of a Coolibah tree

Swagmanは旅をさすらう者、billabongは沼地、Coolibah treeはユーカリの木。ユーカリの林で、沼で

すくったヤビーを食べながら歌うにはぴったりの歌だ。

And he sang as he watched
And waited till his billy boiled
You'll come a-waltzing Matilda with me

Billy は茶沸かし、billy boiled は billabong と韻を踏んでいる。以下はサビの歌詞。

Waltzing Matilda, Waltzing Matilda
You'll come a-waltzing Matilda with me

歌詞の分からないところや、その背景をケンさんに聞いているうちに、とても悲しい歌だということがわかってきた。Waltzing Matilda とは牧場労働者が各地を転々として職を探す旅のことであり、そしてこの歌はストライキで警官に追われた牧場労働者の自殺をきっかけに生まれたのだそうだ。

そんな悲しい歌が、どうしてオーストラリア国民に愛されているのだろう。何よりもメロディが良い。軽やかでありながら、すごく心に響く。歌詞も流れが良く、またユーカリの木や billabong など、オーストラリアならではの風景をつづっているので、オーストラリア国民の琴線に触れるのだろう。このような荒野を旅する経験は、いまでもオーストラリア国民の日常の中にある。彼らはキャンプや旅が大好きだ。羊毛生産が国の基幹産業だった時代のさすらいの旅 Waltzing Matilda は、日本人にとっての奥の細道のような郷愁を誘うのかもしれない。

時は流れ、北京郊外の植物園で開催された国際会議に参加したとき、合衆国からの招待講演者とともに国際親善カラオケ大会に招かれた。植物園のゲストハウスには、世界各国の歌が揃えられていた。そのリストの中に Waltzing Matilda を見つけ、懐かしくなってオーダーした。テキサス大学の David Hillis 博士が一緒に歌ってくれた。デンマーク生まれの合衆国民の彼と、北京でオーストラリアの歌を歌うという、とてもグローバルな体験

をした。オーストラリアの大地に思いを馳せながらこの歌を歌うと、今は亡きケンさんの笑顔が脳裏に浮かんだ。ユーカリの林でキャンプをしながらケンさんとこの歌を歌った日は、もう帰ってこない。でもこの歌はいま、ここにある。これからも、Waltzing Matildaは、たくさんの人の心をとらえて、ずっと歌い継がれていくだろう。